

四国あるき遍路の旅



平成23年2月25日（金）～27日（日）

目次：	頁
三十七番岩本寺	5～
三十八番金剛福寺	10～

札所は、二ヶ寺だけ。

土佐の遍路は、高知市周辺を打ち終えると、一路足摺へと向かいます。徳島から室戸に向かう遍路道同様、札所間の距離が長いところとなります。

その長い遍路道は、距離が最大の難所ですが、その間は当然山あり谷あり、風光明媚な海岸線あり、砂浜ありと変化に富んでいます。私たちのあるき遍路では、そのすべてを歩けるわけではありませんが、長い遍路道のだご味が味わえる部分をピックアップして歩くことにしました。

予定では二泊目にへんろ宿に泊ろうと思いましたが、18名もの団体が泊れるへんろ宿がなく、二泊とも宿坊に泊まることにしました。

まずは列車の旅

もはや通いなれた感のある高知龍馬空港からリムジンでしたが、高知駅に着いて驚かされました。なんと近代的な駅舎に変わっているではありませんか。リムジンバスのバス停も駅の反対側へと移り、いかにもバスターミナルへと変貌を遂げていました。バスを降りて駅舎に入ると、まるで新幹線の駅のようでした。

昼食は、土佐久礼までの車中での思い、「あんどろ」という駅弁屋さんを手配しておきました。おすすめは、「日曜市のオバア弁当」な

のですが、数がそろわず、駅のベンチでいろいろな駅弁の争奪戦となってしまいました。幸い、私は念願の「日曜市のオバア弁当」を手にすることができ、今回の遍路も無事歩けるとの確信を得ました。ちなみに、そのお弁当は、田舎寿司と包装紙に書いてありますが、野菜寿司といったところでしょうか。働き者の日曜市のオバアには似つかわしくなく上品で、やさしい味のお弁当でした。人気があるのも、なるほどと思わせてくれました。



土佐久礼から七子峠越え

高知駅から約一時間、土佐久礼駅で下車し、ここからは歩き遍路の真骨頂の一つ、峠越えです。

三十七番岩本寺への遍路道は、三十六番青龍寺から横浪黒磯ラインを通り須崎から海沿いの道となり、土佐久礼から内陸部に入っていきます。土佐久礼からの遍路道は、土佐往還そえみみず遍路道と大坂遍路道の二つのルートに分かれます。岩本寺の奥さんに聞くと、そえみみず遍路道は整備はされているものの階段が多く、きついですよとのこと。土佐往還というように、かつて土佐の中央と西南部を結ぶ幹線道路だったところを、平成9年頃から遍路道として整備して、往還という歴史を遺そ



七子峠越え

うとしているのだそうです。となると、大坂遍路道こそが本来の遍路道に違いありません。往時の遍路たちは社会から距離を置く修行者だったはずですから、土佐往還と言われるような幹線道路を歩くはずがありませんから・・・。

そこで、私たちは大坂遍路道に行くことにしました。たとえ、雨の時には沢の増水で通行不能になると遍路地図に書かれていようとも。

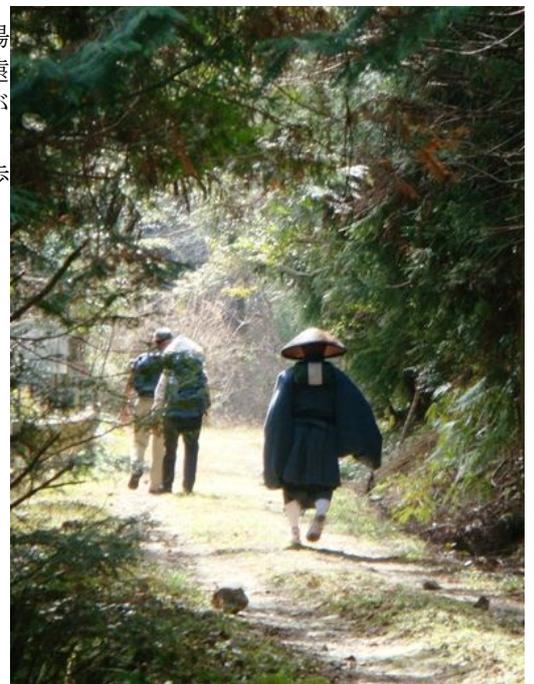
七子峠越えも、峠越えによくあるパターンで、峠の真下までは平坦で最後に峠まで一気に登る道でした。次第に、口数も少なくなり、息が荒くなります。ただし、佐藤さんだけは、「こんなにきついなんて、知らなかったわよー。」「もう二度と遍路には来ない！」

などと、口は達者でした。

最後のきつい登りでしたが、地図を見ると標高は287mで標高差約200mを一気に登ったことになります。ちなみに、そえみみず遍路道だと標高409mまで登って、七子峠まで下って来ることになりますから、きつかったとはいえ、やはり大坂遍路道が正解だったようです。

最後の階段を登り切ると、七子峠のドライブイン駐車場に出ました。展望台からは遠く土佐久礼の海を望むことができました。

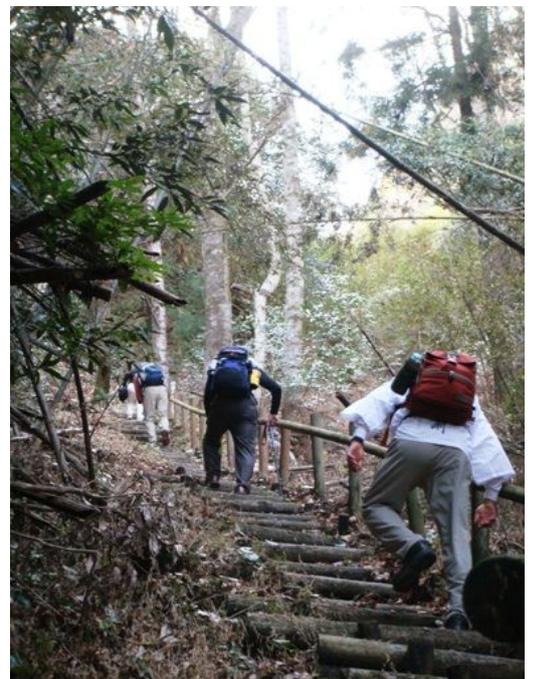
休憩をして、影野駅まで歩きはじめました。



主婦のサガ。道端の無人販売所に安い果物があると、つついって買ってしまうのです。右の旦那さんの渋い顔が印象的です。



次第に皆の顔もうつむきがちになってきました。でも、その先には右の写真のような急こう配の階段が待ち受けていました。



影野駅、そして窪川へ

健脚組、歩く！

七子峠を境に三十七番のある窪川町となります。峠からはほぼ平坦な道になりますから、窪川は高原の町です。

予定の影野駅までは、のどかな農村風景が続き、遍路道は山裾をたどっていきます。

せっかく天気もいいし、雨の日にはできない休憩を、農作業小屋の前でとることにしました。すると、

「和尚さん、ここから岩本寺まで何キロぐらい？」

「だいたい10キロだと思います。」

「歩いたら2時間ちょっとだね。」

時刻はといえば、まだ3時半ぐらいだったのでしょうか、到着予定時間までに歩いて歩けない距離ではありません。そこで、健脚組は岩本寺まで歩くと言い出すではありませんか。きついと言っていた七子峠を越したばかりなのに……。

のんびり組は、影野駅で列車が来るまで、しばし田舎の空気を吸いながらの休憩となりました。

七子峠の展望台にて。
遠くに、土佐久礼の海が見えます。



影野駅から岩本寺へ



「電車と雲水」というのは、写真としてはいい題材ですが、行脚している（つまりは歩いているはずの）お坊さんが電車を待っているというのは考えられないおかしな光景です。

影野駅にて。ようやく電車が来ました。



窪川駅から岩本寺へは、窪川の古い町並みを通って行きます。町中、ひなまつりの飾り付けがしてあり、人通りはありませんが、少し華やかな雰囲気は漂っていました。

三十七番岩本寺



岩本寺到着

影野からの歩き遍路道と線路は並行しています。車中から健脚組の姿が見えないかと目を凝らしているうちに窪川の駅に着いてしまいました。

駅前のバブリーな高知信用金庫を右手に見て、古い町並みを左折して500mほど歩いた正面が、三十七番岩本寺でした。

本堂に着いて、影野から歩いている健脚組が間に合うかどうか思案しましたが、先にお参りをさせてもらうことにしました。ここは本堂内の土間まで入ってお参りをすることができましたが、お参りを終えて外に出たところに健脚組が到着。ようやく到着した健脚組を讃えつつ、再び本堂内で般若心経。やはり全員そろってのお参りの方が同信同行で気持ちがいい。

一日目の宿泊は、ここ岩本寺宿坊。住職いわく、「バブルのころは5～60万人ぐらいのお参りがあったんですが、今はずいぶん減って年間10万人ぐらいです。」それでもすごい参拝の数に驚き、すぐそろばんをはじいた人もいたようです。なるほど、年間5～60万人だったらこんな立派な宿坊も必要だったんだろうと納得しました。遍路シーズンにはまだ早く、宿坊は貸切だったようです。

夕食は品数も多く、なにより久しぶりにお接待をいただきました。しかも、芋焼酎のお接待とあり（左下写真に甕が写っています）、今日の疲れも一気に吹っ飛びました。吹っ飛び過ぎの人はいなかっただか少し心配でしたが・・・。



岩本寺本堂の恵天井。

窪川駅から海の王迎駅



2日目は岩本寺を出立して、窪川駅から遍路が始まりました。

昨日降りた窪川駅の改札を通ると、乗り場は構内のはずれの方にあり、そのホームにも駅舎があるではありませんか。ここ窪川駅はJR土讃線の終着駅と土佐くろしお鉄道の始発駅が並んでいるのです。

窪川駅を出てすぐ右を流れていた川が四万十川だったことに気づいた人がいたでしょうか。四万十



川といえば中村市の上流が有名ですが、そのまた上流に位置するのが、ここ窪川町です。

川から離れて山の中に入った電車は、ループ式に高原から低地へと降りて行きましたが、どうやら列車に揺られてまぶたが重くなった人ばかりで、気づく人もいなかったようです。昨日、私たちが越えた七子峠までの標高差以上の250mを車体をきしませながら降りて行ったのです。

井ノ岬をトンネルで抜けて、「うみのおうむかえ海の王迎駅」で下車すると、ここから四万十川の河口までは海岸沿いの遍路道です。途中に食堂などあるはずもなく、20分ほど歩いたところにある道の駅で、昼食弁当を調達。あとは何も心配せず、四万十川を目指せばいいのです。

「海の王迎駅」から海岸に出る下り坂。海の向こうに足摺の山並みを望めます。2日目に目指すのは、あの突端にある三十八番金剛福寺です。



【右】「和尚さん、撮らせて一つ。」と梁川さんが撮った写真。荷物は前後の振り分けになっていて、頭陀袋に入り切れないときは、このように後ろにもくくりつけられます。伝統的な雲水姿ですが、非常に合理的にできています。でも、弁当の中身の海老フライまで見えたのはうかつだった。



大方海岸を西へ

道の駅は、大方町の大型海浜公園の入口にあります。遍路道は、海浜公園のサイクリングロードに姿を変えて、松林の中を西に向かって真っすぐです。松林を抜けると、広い海原を左に見ながら歩くことになります。みちしるべにしたがって右に曲がると、らっきょう畑が広がっていました。

公園西の川を渡ると、田野浦そして出口の漁村の中を歩いていきますが、道から海は見えなくなり、どこか山の中の集落を歩いている錯覚を起こしてしまうようです。

そろそろ、おなかも空いてきて、どこかでお弁当を広げられるところを探そうという時間になってきました。出口の集落から海に出られそうな道。行ってみると、広い砂浜と黒潮が打ち寄せる岩場という絵にかいたような景色が広がっていて、格好の昼食場所を発見できました。きれいな景色と波音もおかずに、道の駅で買ったお弁当は、最高のごちそうになりました。



2日目の昼食を食べた出口海岸。旅行ガイドにも載っていないようなところですが、素晴らしい景色の海岸でした。他に人影もなく、私たち遍路一行の貸切でした。



出口海岸から四万十川



【上左】四万十大橋へのみちしるべもない道。
 【上右】ようやく四万十川の堤防にたどりつきました。
 【下左】堤防上を歩く和尚。
 【下右】四万十大橋。

四万十を渡る

出口海岸からサーフィンで有名な平野海岸、そして四万十川河口の渡し舟の予定だったのが、昨年大雨で河口の地形が変わってしまい、舟は欠航中。以前の渡し舟が廃業の後、保存会ができて運航を再開していたのに、残念！

というわけで、四万十川を渡るには、一番河口に近い四万十大橋を渡るしかありません。平野海岸から四万十大橋までは、遍路地図にも載っていない、ということのみちしるべもない道を、パソコンでダウンロードした地図を頼りに歩きました。これぐらい不安なこともないのですが、たまたま出会ったウォーキングの人に教えられたりもして、迷うことなく四万十川の堤防にたどりつくことができました。

「人生即遍路」ということであれば、私たちも人生を歩く上での地図やみちしるべが必要だということを、改めて感じさせられた道だった気がします。そして、四万十川を無事にわたることができたことも、三途の川を渡るに置き換えることができる気がしてきました。

四万十川を渡ったところで路線バスに乗って一路足摺の予定でしたが、予定時刻よりだいぶ早く到着したので、次のバス停まで歩くことにしました。

ここでも健脚組は、時刻表と脚力を照らして、もう一つ先のバス停まで歩いて行きました。

残されたのんびり組は、四万十川野鳥自然公園で、バスの到着までしばしの休憩となりました。



足摺到着

高知西南交通バス、初崎入口バス停を15:50発、所要時間約一時間半、足摺岬に17:31に到着しました。

できれば岬の付け根に位置する以布利のへんろ宿に泊って、三日目に足摺岬までの遍路道を歩こうと思いましたが、ところが、20人も泊れるへんろ宿がなく、仕方なく金剛福寺宿坊に泊らざるを得ず、バスにて足摺岬に直行となったわけです。

へんろ宿に泊れなくなり、金剛福寺に電話をすると、この時期は休んでいるんですとのこと。なんとか交渉すると、20人の団体ならということで予約できました。

かたや20人で断られ、かたや20人で泊ることができ、これまた「人生即遍路、遍路即人生」を感じました。



金剛福寺宿坊の夕食



金剛福寺宿坊の朝食

三十八番金剛福寺出発

足摺岬の灯台をバックに、朝日を浴びながらの一枚。



金剛福寺から足摺を逆打ち

三十八番金剛福寺のお参りを終え、三日目に次の札所もお参りしようと思うと、丸一日バス・電車での移動ばかりになってしまいます。それでは歩き遍路の道にはずれることとなります。

本当の歩き遍路なら、三十八番をお参りした後、再び来た道に戻るか、足摺の東西どちらかの海岸沿いに打ち戻るしかありません。そこで、私たちは足摺の東側、当

初の予定で歩くはずだった遍路道を北上することになりました。足摺の東側は道幅も狭く、民家も車の交通量も少ないところです。なにより、かつて歩いた時に、歩き遍路道らしさがよく残っていた記憶があるからです。

足摺岬の展望台に立ち寄り、足摺の断崖と灯台を眺めたら、いよいよ最終日の歩きの始まりとなります。

「歩き」軽視の道づくり

約8年ぶりでしょうか。足摺の道も様変わりしていました。

生活している人のために車が通りやすい道を作る必要があるのは大いにわかります。しかし、それに伴って遍路道が寸断され、なかにはどこが遍路道かわからなくなっている所さえありました。「四国八十八ヶ所を世界遺産に！」というなら、せめて遍路道という歴史的財産をわかるようにだけでもしてもらいたいと思いました。

さらに、逆打ちでみちしるべも反対側を向いていますから、歩き遍路道を探し探しながら歩くこと

になりました。

象徴的だったのは、窪津漁港を過ぎてからの道でした。遍路道は、漁港に迫る山の中に入り、山越えとなります。木が生い茂り、丸太橋を渡り、いかにも山中の遍路道。いっぽう、尚美さんが歩いた車道は岬を巡り、距離的には遠いのですが、平坦な道。遍路道と車道との合流点で、尚美さんといっしょになりました。道づくりは、早くを優先して、遍路もそっちを通ればいだろうという考えを見せつけられた気がしました。



津呂のへんろ小屋

足摺から約6キロ、津呂の集落を抜けようとするところに、「へんろ小屋」がありました。いかにも村の人が手作りしたという小屋で、奥には宿泊もできるような場所もありました。のぞいてみると、大きなリュックが置いてあり、昨日泊った人の荷物のようでした。土間にはストーブもあり、水道・トイレも完備です。また、お接待とおぼしきみかんも置いてあったので、ありがたくいただき

ました。
へんろ小屋を後にしたら、しばらくは車道といっしょになった遍路道ですが、ちょうどマラソン大会があるらしく、ウォーミングアップ中の選手たちと何人もすれちがいました。その大会がなければ、ほとんど人とすれ違うこともないような道ですが、なんとなくにぎやかな空気に包まれて歩くことができました。



「あしずり遍路道」

やはり車道と一緒にではない遍路道はいいですね。

津呂の集落を過ぎると、遍路地図にも載っていないような歩き遍路道が残っていて、これぞ歩き遍路のだいご味といった感です。

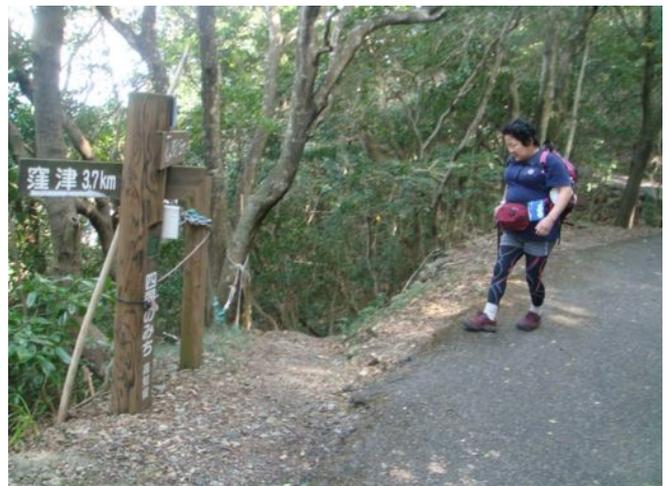
一巡目では、遍路道をいのししが荒らしていましたが、今回はタケノコを食い散らかした跡はあったものの、それほど遍路道を荒らしている様子はありませんでした。しかし、まだ頭も出していないタケノコをうまく探すもんです。若いタケノコの皮があちこちに散らかっていました。

窪津漁港はマラソン大会の中継地点なのか、選手がわんさかいました。この人出を見越してなのか、屋台や新鮮な魚を売る店も賑

やかでした。でも、マラソン大会に出た人が魚を買っていくものでしょうか。もちろん、歩き遍路は魚なんか買っていくことはありませんが・・・。

マラソン大会の喧騒をよそに、急坂を登って山の中に入ると、それはそれは静寂な歩き遍路たちの世界。川を渡り、石ころだらけの道を歩き、急坂を下り・・・、これで夕方には飛行機に乗り、夜には千葉に居ることが不思議に思えるほどの山の中です。

山を抜けたら、バスに乗る予定の以布利まで1.5キロほど、12時18分のバス時刻が気になってきました。後続組は大丈夫だろうか。





以布利への最後の下り坂を降りると、以布利の海が広がっています。



以布利のバス停に着いた先発組。後続組がバスに間に合うかどうか心配しています。

ギリギリセーフ

先発組が以布利のバス停に着くと、バス時刻まで20分弱。後続組がどこまで来ているか携帯で聞くと、歩いて20分でバス停までは来れないところ。ここで乗り遅れたら中村までタクシーしかありません。後続組にタクシー会社の電話番号を教え、タクシーでバス停まで来るように指示。ところが、何を間違えたかタクシーはバス停にやってきました。あわてて事情を話し、後続組を迎えに行ってもらいました。

バス停でやきもきしていましたが、なんとかタクシーも間に合い、全員バスに乗車して中村に向

かうことができ、ほっとしました。

中村からは土佐くろしお鉄道の特急で一時間半、高知駅から乗りなれた空港リムジンで高知龍馬空港。高知龍馬空港に降り立つのも次回のみとなりました。

今回もなんとか無事に歩くことができました。お疲れ様でした。

写真：石川 信子
梁川 律子
宮田 宗格
文：宮田 宗格
編集：宮田 宗格

臨済宗妙心寺派 圓福寺
263-0025
千葉県稲毛区穴川町375

電話 043(251)9181
FAX 043(251)9549
<http://www.chiba-enpukuji.com>
Email: oshou@chiba-enpukuji.com

編集後記

四国から帰って、写真集の編集をのんびり構えていたら、3月11日の東日本大震災が起きて、落ち着かないまま日々が過ぎてしまいました。

7月発行の寺報に第7回の歩き遍路の記事を載せなければと、お尻に火がついた状態で、施餓鬼の準備と並行しての編集となってしまいました。

最初から言い訳で恐縮ですが、あわただしい編集なので、間違いや思い違いなどもあるかと思えます。そこら辺は、各自で訂正しながらご覧いただければ幸いです。

なお、この写真集は圓福寺ホームページにも掲載させていただくことを、あら

かじめご承知おきください。

第八回は、平成23年11月25日から27日の二泊三日を予定しております。いよいよ愛媛県に入りますが、松尾峠が待ち構えております。どうぞご期待の上、みなさんのご参加をお待ちしております。

つたない写真集を最後までご覧いただき、ありがとうございました。



2巡目第7回
平成23年
2月25日～27日